



和漢文檢

論類
解類
義類
記類

六

5
4710
6



5
4710
6

和漢文操

和漢文操卷之六

論類

徳利論

張昇角

此論の酒めらうの相と唐の文和のたくとは
下毛の風流とせられし唐土の詩人を模の影き
とあり我々の能活脚を徳利の思ふる形とあり
されけ拍の世もあらずへ唐土の書はるる節
中り保ふの執らるる業よけり天とまらるる地を
きつるる節無不動のわらるる屋のまらるる

昭和元年
三月二十日
十日
長男及子
於此

あれらうと尚おしをれりかしの能はうと南^キ京
交趾^{カウチ}の婿とかさり唐は佛室の各とあまふか
とて彼らちのあふれく尼達のためく美^ミ津^ツは
りき^キの部のあふれく^クの調^{テウ}ふりありぬき^キの
買^カはる錦^{キン}手^テ入^ニわらう^ウもあふれく^クの^ノ心^{シン}家^カ
り^リ節^{セツ}茶^{チャ}の名^ナとまは^ハん^ン又^{マタ}この^ノお^オま^マの
て^テ移^シく^ク社^{シャ}系^{ケイ}の色^{シキ}香^{カウ}とあ^アら^ラと^ト婦^フま^マい^イさ^サの^ノ持^チ
し^シく^クれ^レぬ^ヌ飲^{キン}心^{シン}北^キ切^キ法^{ホウ}の^ノ法^{ホウ}と^トは^ハく^クあ^アま^マや

○註曰△易^イ擊^キ絳^{キョウ}寂^{シキ}然^{ゼン}不^フ動^{ドウ}感^{カン}而^ニ遂^{ズイ}通^{トウ}云^ク下^カ之^ノ故^コ ▲晉^{シン}史^シ
阮^ニ籍^キ能^ニ存^ス青^{キョウ}白^{ハク}眼^{ガン}之^ノ白^{ハク}眼^{ガン}ハ^ハ暇^カ時^ジナリ△測^{ソク}明^{メイ}賦^ヒ有^ク過^カ盈^{エイ}

樽^{ソン}之^ノ▲武^ブ陟^シ下^カハ^ハ江^{カウ}戸^コ市^シナリ津^ツ國^{クニ}ノ伊^イ丹^{タン}酒^{シュ}ヲ上^{ジョウ}品^{ヒン}也^{ナリ}六^{ロク}船^{セン}中^{チュウ}
ハ^ハ厚^{コウ}ナ^ナカラ^ラ店^{テン}ニ^ニ積^{セキ}テ^テ唐^{コウ}被^ヘト^ト八^{ハチ}新^{シン}到^{トウ}ノ^ノ種^{シュウ}ナリ ▲高^{カウ}氏^シ文^{ブン}律^{リツ}ニ
黃^{ワウ}纒^{マン}纒^{マン}林^{リン}寒^{カン}首^{シュ}葉^{エフ}氏^シ林^{リン}向^{キョウ}暖^{ネン}酒^{シュ}燒^{キョウ}紅^{コウ}葉^{エフ}氏^シニ^ニ章^{シヤウ}ヲ^ヲ裁^{サイ}
入^ニテ^テ百^{ヒャク}ト^ト成^{セイ}セリ△儀^ギ武^ブ故^コ事^ジニ^ニ美^{メイ}客^{キヤク}を^ヲ敬^{キョウ}テ^テ通^{トウ}天^{テン}其^キ至^シノ^ノ上^{ジョウ}
露^ロヲ^ヲ承^{セイ}ル^ル也^{ナリ}押^{オシ}ス^ルニ^ニ一^{イチ}對^{テイ}ハ^ハ故^コ也^{ナリ}採^{サイ}リ^リ古^コ語^ゴヲ^ヲ摘^{テキ}ム^ム轉^{テン}換^{カン}自^ジ
在^ニノ^ノ鑑^{カン}ト^ト云^クシ^シ去^キル^ル纒^{マン}纒^{マン}ト^ト其^キ客^{キヤク}ト^ト連^{レン}綿^{メン}ヲ^ヲ對^{テイ}セ^シト^ト其^キ金^{キン}一^{イチ}字^ジ
ヲ^ヲ銷^{シヨウ}綜^{ソウ}セ^シル^ル林^{リン}ト^ト其^キ至^シノ^ノ字^ジ對^{テイ}ヨリ^リ紅^{コウ}葉^{エフ}ト^ト黃^{ワウ}金^{キン}ノ^ノ光^{カウ}教^{キョウ}ハ^ハ三^{サン}口^{コウ}ハ
ス^ス格^{カク}ニ^ニ互^ゴ照^{テウ}ノ^ノ絶^{ケツ}妙^{ミョウ}ト^ト稱^{セイ}ス^ルシ●山^{サン}谷^{コク}四^シ休^{キウ}詩^シニ^ニ平^{ヘイ}二^ニ滿^{マン}飽^{ボウ}即^{キョク}
休^{キウ}云^ク平^{ヘイ}二^ニ滿^{マン}八^{ハチ}類^{レイ}ノ^ノ高^{カウ}俊^{シュン}ヲ^ヲ倭^{ヤマト}語^ゴニ^ニ歸^キル^ル也^{ナリ}△漢^{カン}書^{ショ}
上^{ジョウ}錢^{セン}朱^{シュ}買^カ臣^{チン}會^{ケイ}秘^ヒ古^コ大^{ダイ}守^{シュ}回^{クワイ}富^フ貴^キ不^フ歸^キ古^コ鄉^{キョウ}知^チ之^ノ錦^{キン}夜^ヤ
行^{キョウ}○一^{イチ}休^{キウ}和^ワ者^{シャ}齊^{サイ}推^{ツイ}采^{サイ}を^ヲ以^リつ^クこの^ノ有^クく^クと^トり^リは^ハた^タを^ヲあ^アま^マ
く^クる^ル又^{マタ}上^{ジョウ}ハ^ハの^ノ△頼^{ライ}以^リ北^キ功^{コウ}徳^{トク}ハ^ハ念^{ネン}仏^{ブツ}ノ^ノ結^{ケツ}文^{ブン}ヲ^ヲ使^シ一^{イチ}子^シノ^ノ結^{ケツ}語^ゴナリ

○評云け論と好より後まう格と使判とて早と海一
人同いよ此其宗と好いんはつとていんあつていんあつ
い及いんあつていんあつていんあつていんあつていんあつ
各も常も四條の色は宗とてあつていんあつていんあつていんあつ
つて設論の成るといんあつていんあつていんあつていんあつ

論論

岸倚彦

いづつ下り談いづつ月お入葉汁朱の歌いんあつ
非祇新教と論いんあつていんあつていんあつていんあつ
くの島島のそれあつていんあつていんあつていんあつていんあつ
いおあつていんあつていんあつていんあつていんあつていんあつ

圃とあつていんあつていんあつていんあつていんあつていんあつ
あつていんあつていんあつていんあつていんあつていんあつ
へつていんあつていんあつていんあつていんあつていんあつ
拙者等の論いんあつていんあつていんあつていんあつていんあつ
花のまあつていんあつていんあつていんあつていんあつていんあつ
いんあつていんあつていんあつていんあつていんあつていんあつ
きつていんあつていんあつていんあつていんあつていんあつ
い我家のあつていんあつていんあつていんあつていんあつていんあつ
とあつていんあつていんあつていんあつていんあつていんあつ
そふに月のおあつていんあつていんあつていんあつていんあつ

不掃地論

東老坊

我庵者非都之辰己兮從本非爾所佳心
 兮佳時者任木葉之風而還日者洗蓬生
 之露則年兮月兮花程為過葉松兮葉兮
 斯迄荒果止乎測明麼無辭于茲鳥矣今
 年者迎古鄉之春而松者不忘佳肯之友
 麼浮世之道麼所斷許人尔者彼謂喜之
 松泉矣春者雉子之通棠居秋者山雀之
 尋塘而芳野之花麼更科之月麼掃地麼

而竟孰國矣斯言則在世人之有面自小倉
 之山在而為似態佗我身共造處尔者不
 遺得木鏤兮直垣尔者不知枝折結兮頃
 物迫事而不得已時者村右範東羽之樓
 踊而不知養其日之老葉尤在共所謂斯
 謂之草因果歷然之喻事者打唵手盛之
 飯而息災也了伯父之事也葉我有好厭
 葉飯于霜夜居爾夕歸于雨日則極麼着
 心於起即而嘔那思六箇敷葉矣鬼成角
 成乍成心麼世者不有安令習所哉或時

有掃好之和尚而詠給我庵止乎都之
 詠庭之氣色而世者不知無限物也
 者飽我庭之常月而此庭之更不雨而露
 廢涼敷荻荻者彼令有暖燄野之真共去
 此不遠中實麼美給住居則至者卡我
 庭之松風為得手揚帆心地猿耶若夫人
 情之令習述物有好惡之變則人之飽其
 庭之結搆而有面白庭之不掃地與我
 者飽此庭之不掃地而有面白其庭之結
 搆面白意者五五也共人來而十倍此耶

也則我往而百倍其所也
 則常束結搆人者筆好紅粉之色則蒂惡
 如珠之累而雖自娛掃地求者皆不苦
 耶自苦而厭人者可謂損之損辱哉君看
 庭不掃地人者詠其身其終之庭而厭我
 宛願人宛遊心之易遊了則為得之得也
 為不信之百倍乘或翁麼劫投此理而居
 早而交角居虛而行實與所增而論禪家
 之意地則往極樂者易了共遊地獄者難
 樂哉和尚向何處去扣墨而掛一向了則

日已傾西而秋色涼誘引終些歸我寺而
振舞雲土園之西凡一連不撫敢摘尼之髮
度向各名矣爾揚棚而不鎖例之尻戶而
折笑虎溪之橋而過矣

○註曰○在撰身○後居○と○の○を○さ○ま○ま○む○世○に○ち
ゆくゆくの○色○挿○を○世○を○か○ん○云○す○り○我○ハ○云○ハ○云○く○と○ハ
爾所ト書テ如斯ト註スレ古抄何レ希明ト云ト遺稿
在諸ニ世評アリ世等ニ大和真名ノ當用ヲ稱スレ和歌ニ假名
真名ノ取違ハ多シ△例明歸去來辭ニ經乾云松葉
尚存○與風和○流とくしきんをむむのねし
のふあふくん○西りくそせのちれんるさ百のねあ

わうしちのふくくそせをれ △山名ノ山在ハ溪隈ニ在リ
定家婦ノ別在ナリ△在子養生主編賢ウ身經註
縁頃也督迫也不得已而後起也△世談伯又カ甥ノ
草ヲ列ト八嫡家ト庶流ノ泉報ナカラ渡世ニ身持ノ誠ト知
△右靴モ東羽モ先師ノ獨子ナリ ○括遺集 卷ノ下
狗のこころは風つりともありかくありあふん我梅スニ世改ハ
我者ノ起語ヨリ念習ハ緒語ニ論者ノ老情ヲ演スル
ト云之嫌麼着心ヲ起卧ト八例ニ他諸ノ雅言ヨリ歌人連
ニ号ノ艶詞ヲ敷キテ世等ヲ大和真名ノ絶妙ト稱スレ
△去北不遠八前ニ出スリ○領阿齊△山ノのむらさきもやとれ
まうけいこふいんたうそりしれ △左大仲招隱詩 山名
無結構ト八陰榭ノ無造作ヲ云リ △大惠語 束之皆苦

△君看上諸人指之詞ヲ禪録ニ載多アリ△或云爾上老子
取意ヲ合セテ我家ノ名ヲ云云ニヤ白馬遺訓ニ僧徒中下
ノ凡雅といふも中下ノ言りとの中下ノ人とい
ひくと云々虚妄論ニ虚ヲ居て實をたもつて一実もあ
り虚よありあつと云々此ニ語ハ崔氏ノ要言下下和尙對テ
我祖ヲ讚ス或云爾上時宜ノ文法ナリ△禪語ニ易遊天堂進
入地獄按之ニ或云爾以下ニ章ハ禪家ト飾行ノ意地ヲ觀
スル論ハ此ニ章ニ有破スナリ△此れク竹ノそめくゆ
おろくもあり今ヲ誘フ詞ナリ△西至園ハ其寺ノ教團
黃山ノ東園ニ在テ書經ニ西至夢ノ珠言ナリト其後其烟ニ
蓮ニ序ノ別墅ヲ構ヘ或ハ黃山老人トモ云リト其後其尼
ハ白狂ヲ童名ナリ聯自行ニ其故アリ△虎溪ニ名ハ章ニ及

△云々人連ノ形容ナリ

○譯云は論を曲折深きことして虚を以て例の虚ありや
いんむ能きりなり人向せよ好惡の亦ありしり其
もれりよ法一かきくふとりのるれもをねの優遊と
て又偏の人和と要とあるり許容の實と稱といふや
は偏の和尙と先師といふり行るの心ありしりその
優遊の實とあるりいんむと能行の虚といふは例
のありし敵ありし禪家遠ケの知識あり

苜蓿論

廣達支

人ノ好しつゝい枯あつしつゝり意ハあつしつゝりあつし

おちくちとよめは侍りし一はらとくまは歌とまじり
 東の殿とくまむくんと可下は合神の侍はあれ
 好侍の侍らあまらく一今や能侍の侍は
 人よ皇座のまじりひらちるれと昔は侍のまじり
 まれあらしく武陵のまの侍はくもはらはれと
 新のまのまじり皇座のまの侍はくもはらはれと
 お好より我の侍しと侍はくもはらはれと
 るるまじりも侍のまの侍はくもはらはれと
 業もくまむくんと侍のまの侍はくもはらはれと
 舞のまのまじりも侍のまの侍はくもはらはれと

皇座のまのまじりも侍のまの侍はくもはらはれと
 皇座のまのまじりも侍のまの侍はくもはらはれと
 皇座のまのまじりも侍のまの侍はくもはらはれと
 皇座のまのまじりも侍のまの侍はくもはらはれと
 皇座のまのまじりも侍のまの侍はくもはらはれと
 皇座のまのまじりも侍のまの侍はくもはらはれと
 皇座のまのまじりも侍のまの侍はくもはらはれと
 皇座のまのまじりも侍のまの侍はくもはらはれと
 皇座のまのまじりも侍のまの侍はくもはらはれと
 皇座のまのまじりも侍のまの侍はくもはらはれと

秘之の位とありしとされし也

○註曰△武陵公雨トハ甚篤公雨ナリ 甚弱ノ風雅ト温飢ノ
好色トハ白馬類説ニ祖翁ノ言ナリ 當時ノ俳集ニ真
詞アリ再奉ニ及之 ▲南陽雜俎淮南王始製豆腐云
賦類ニ出タリ ○江終ニ云宿傳記云介冑を以て子
まゝ〜〜とありき〜とありき〜とありき〜とありき
和尙普洞ノ雨山ナリ都内ニ我宗ノ寺ヲ建テカラズ計
越前ノ永平寺ヲ本山トセリト多三棒下トハ天不降
名目ノ禪語ニ似タレ云レヤ△論語ニ一簞食一瓢飲回也
不改其樂△數奇ノ字ハ和漢ノ通語ナリ 棒ニ遺福
ノ夜話ニ數奇トハ漢文ノ好事ナリ長キ物ニ短キヲ取人ニセ

圓十ノ前ニ方丈物ヲ置テ物ノ數奇ナル故ニ茶人ヲ呼ビテ
數奇者ト云ヘリ 辟言ハ野ノ大茶湯ニキ雲龍ヲ掛タレ
類ナリ今ノ茶湯ノ抄物ヲ見レ數奇ノ字訓ヲ失ヘリ
△家語ニ邦有道則出而行邦無道則藏云
○便云は漏ト例の證云あり〜とあり〜とあり〜とあり
例の汎諫と云あり〜とあり〜とあり〜とあり
とあり〜とあり〜とあり〜とあり〜とあり〜とあり
海とあり〜とあり〜とあり〜とあり〜とあり〜とあり
い甚弱とあり〜とあり〜とあり〜とあり〜とあり〜とあり
か〜とあり〜とあり〜とあり〜とあり〜とあり〜とあり
和氣の〜とあり〜とあり〜とあり〜とあり〜とあり〜とあり
〜とあり〜とあり〜とあり〜とあり〜とあり〜とあり

まじりて佳利ノ鮫と罵る事さへわらふに似たり
もまじりてはらく万物の事とありてあつて麻子といふ
るれ大なる子と云ふにけりさこそちからに法をいふにあ
れぬ鮫のまじりて和らむとせしめられたるの由と
みまじりてはまじりてはまじりてはまじりてはまじりて
さあまじりて和らむといふありてはまじりてはまじりて
あつてはまじりてはまじりてはまじりてはまじりて

○註曰○嘉元百三、歎きの所あやまらんとせしめりてを
よるれをとありてまじりてはまじりてはまじりてはまじりて
山ノ落ト下云う古なり △月令夏六月下ニ在り文ノ起結ヲ見

キナリ △礼記月令ニ季春田鼠化爲鼯鼠云々季秋
大水ニ至蛇云々 △法苑珠林ノ竜女成仙ノ段ニ夏成男子ノ夏
り狂言ノ例ノ粉成なり △佳利ノ鮫ノ隱買ノ才道ヲ云り
輕ハノ嘯ナリ ▲韓非子ニ卞和抱玉璞後ニ璞又先ノ玉トノ
○語云け解と例の誣語云々 蛇と草有世類と歎文云々
同名異字の沙推とありて 孫と忠芋と 路特と
雲名同変のるを解とあると文心散電云々
角刀牛の釈文よりもこれを解の的中と移さぬ
ちりて中間の鼓舞と語をへ流傳の二字は供と記
て腥物と粒と云々に也芋の用此分ちることを章の
カと子一作者を山室云々云々越の福井ノ段もた
まじりてはまじりてはまじりてはまじりてはまじりて

此こそ一脈とかけて我きおしとて楽まじとけさむ

○註曰△保命はゆるき。有りやとひをえもいをもしおろくき
 いまもと一はくおろしうらまういさる屋もぬらりぬり
 ありししといきありやとありとあり ▲虚生力長く栄耀
 も在周力蝶道通王前ニ出たり ○る人こそまのあはれ
 るんそりちりちり松かいかくきむむるこしおきれ
 ▲列子黃帝昼寢夢遊華胥氏之國其後天下大治▲論語
 宰予昼寢子曰朽木不可彫也糞土之牆不可朽▲車胤
 螢ヲ聚テ讀書ノ古毛孫康カ雪ヲ積テ字文ノ夏モ諸書ニ在
 細筆ニ及ハス △論語曲肱ノ樂モ三則ニ出たり
 ○浮云け解と虚実の當用ト一トを兼つるはさるも
 心もも兼入りのありとさるも解の自在とつて例の

人指とをさりと称ま一はや黄帝と宰るのさる
 の好意と裁おしし食後の二睡一自己とさるめ
 されと解の解とふ一作者と文證の得る名保
 ありし物との執中ありし京子保のさるさる

○歳類

摺木木歳

仙里紅

此こそ一万物万象の中一摺木木と子おあり月
 なく耳もなれとも用かれれおの平ははくも用い
 されの蔭の晴しわかれおられぬ渾沌未分のかち

よりすれ用ちるゆへに海にけりし海
さうら菊々の花は角とらけりし海にけりし海
とあやして利きし海にけりし海にけりし海
用ちるにけりし海にけりし海にけりし海
より大海のあふきし海にけりし海にけりし海
白みし海にけりし海にけりし海にけりし海
おちし海にけりし海にけりし海にけりし海
のさくし海にけりし海にけりし海にけりし海
ぬくし海にけりし海にけりし海にけりし海
お月のはらけりし海にけりし海にけりし海

のちと扱わまらうとけりし海にけりし海
くらちし海にけりし海にけりし海にけりし海
その祖所のけりし海にけりし海にけりし海
とけりし海にけりし海にけりし海にけりし海
はなれし海にけりし海にけりし海にけりし海
けりし海にけりし海にけりし海にけりし海
境界とけりし海にけりし海にけりし海にけりし海
とけりし海にけりし海にけりし海にけりし海
とけりし海にけりし海にけりし海にけりし海
とけりし海にけりし海にけりし海にけりし海
の并きよはれし海にけりし海にけりし海

○浮云は文と云る嵐の二格として云はるは地と
 保るは心としらるは柳の中あゆむは心と母色の
 二子一形容して歳の子よふ文とほくちきりの言と
 隠見の秘はとふ一一なるを例のあやとてまも也
 ちも石舟の保るおとと社陣ふん平母の故とて人
 物への神走の故とてまもいてさるも言著とてか
 あつてとてと例と説書の説法あつてとて説書の
 絶好と秘と一一作者と西濃の北方より著して
 仙石と氏と一頁麴園と標号とてと柳子門の
 授記のまもあつてとて

長巻巻

渡吾仲

ふかおの中比のしたとてとて言あつて歎言あつて
 津とあれたつとと船とてとて言あつてとて言あつて
 の私教あつてとて言あつてとて言あつてとて言あつて
 隆奎ととてとてあれたつととて言あつてとて言あつて
 可しとてとてとてあれたつととて言あつてとて言あつて
 作れる。唐筆鏡と信おの言は著あつてとて言あつて
 とて言あつてとて言あつてとて言あつてとて言あつて
 以後ちり一一和訓と戯事ヌハユトの更古語あつてとて言あつて
 とて言あつてとて言あつてとて言あつてとて言あつて
 儒師のあつてとて言あつてとて言あつてとて言あつて

めし着らるおのあふひとてしるすもく
 又と敵あふしるふもくしるすもく
 一語して佳言も客のれとてしるすもく
 とはしるすもく茶の子とておのあふひとてしるすもく
 一頭とてしるすもく茶の子とておのあふひとてしるすもく
 女の流しるすもくおのあふひとてしるすもく
 拾遺とてしるすもくおのあふひとてしるすもく
 一とてしるすもくおのあふひとてしるすもく
 廣義人めるとてしるすもくおのあふひとてしるすもく
 何とてしるすもくおのあふひとてしるすもく

めし着らるおのあふひとてしるすもく
 又と敵あふしるふもくしるすもく
 一語して佳言も客のれとてしるすもく
 とはしるすもく茶の子とておのあふひとてしるすもく
 一頭とてしるすもく茶の子とておのあふひとてしるすもく
 女の流しるすもくおのあふひとてしるすもく
 拾遺とてしるすもくおのあふひとてしるすもく
 一とてしるすもくおのあふひとてしるすもく
 廣義人めるとてしるすもくおのあふひとてしるすもく
 何とてしるすもくおのあふひとてしるすもく

一〇富子の體はあひまもゆるあまもゆるあまもゆる
 一〇一はらわらけきれしはらわらけきれしはらわらけきれし
 あんはらわらけきれしはらわらけきれしはらわらけきれし
 ともやちとて舞ふ宿務のむらさきもたれしはらわらけきれし
 舞のあまもゆるあまもゆるあまもゆるあまもゆるあまもゆる
 一〇二はらわらけきれしはらわらけきれしはらわらけきれし
 一〇三はらわらけきれしはらわらけきれしはらわらけきれし
 一〇四はらわらけきれしはらわらけきれしはらわらけきれし
 一〇五はらわらけきれしはらわらけきれしはらわらけきれし
 一〇六はらわらけきれしはらわらけきれしはらわらけきれし
 一〇七はらわらけきれしはらわらけきれしはらわらけきれし
 一〇八はらわらけきれしはらわらけきれしはらわらけきれし
 一〇九はらわらけきれしはらわらけきれしはらわらけきれし
 一〇一〇はらわらけきれしはらわらけきれしはらわらけきれし

〇註曰世説王敦每醉後以欵如意敲唾壺歌云
 亂心わらわらけきれしはらわらけきれしはらわらけきれし

●中者瓊之軒詩註所謂君波女鏡倭朝之君良也
 △漳州府志ハ洪波姑トアリ△羅山文集ハ多波古布施事
 トアリ△百靈語ナリト△本州洞註烟州或想思州也
 △文選ニ伯倫ヲ酒任頌アリ奉ルニ及ス△漁隱後集盧全
 ナ奉歌アリ奉ルニ及ス擗スニ此一段ハ茶ト酒トノ好悪ヲ云
 ニ敵取ノ意言六常ニテハハリノ多クノ頭とちくもさしこ
 倭語ニ漢文ノ勢多假テ詞ニ千里ノ野ヲ擴テ筆ニ万里
 ノ地ヲ縮ト云レ文ニ形容ノ絶妙ト稱スレ△義人州ノ古ハ
 前ニ山ナリ△定家曼言ハ其詩ニ亦子内親王ノ執事ナリ
 △吹笛圖ハ玄宗ト貴妃ナリ其詩ニ而推指貴妃吹云云即
 ハ玄宗ノ雅名ナリ ○ありやに鹿山くまやとよはし
 ありやに鹿山くまやとよはしありやに鹿山くまやとよはし

とていふ事なくともかゝるものなりと云ふは、
富土寺に伝へられたりとの傳の事なりと云ふは、
秋のりひの△無心所着下和身二論方の解之 △林經註
△持戒の何はより奉ん及△家語六辨物篇あり物ノ奇怪
ヲ記せり △論語酒無量不及乱は
○ほむげんと劉亮射すべしと云ふは、
もやをたすも後放すべしと云ふは、
子ほの富言をくせんと云ふは、
やうけ文の用と云ふは、
す用の用と云ふは、

猿峯

僧一空

あらざりや猿と山王のほらりやうと云ふは、
しゆとせと云ふは、
みまゝと孫子のねもと云ふは、
ちりりらりあ月のまじりやうと云ふは、
と云ふは、
えと云ふは、
和漢と名と云ふは、
それら中にも△亞破の曉は、
らりも△曾の△中り人とならうと云ふは、
せりも猿も△中り人とならうと云ふは、

得見此師口聲、如屋上有三窓、內有一櫺、推之、△二程
全書、親聽言動、四歲、予、伊、之、程、正、叔、擇、其、善、者、

○得、云、け、論、と、虚、中、入、ち、い、り、り、て、歳、の、い、ま、い、ま、い、と、
い、い、ま、ま、と、人、の、い、ま、を、辨、し、ち、こ、う、て、自、己、の、其、中、と、
ま、り、た、り、再、思、の、歳、あ、り、ま、り、ま、り、と、伊、の、其、歳、
と、敵、一、能、活、と、ま、活、の、あ、り、ま、り、ま、り、と、い、ま、い、ま、い、と、
ま、い、ま、い、と、人、天、の、兩、用、を、た、し、ま、り、ま、り、ま、り、と、
の、ま、い、ま、い、と、あ、り、ま、り、ま、り、と、予、録、の、遺、刻、を、手、作、者、
の、同、信、の、若、用、の、善、一、一、字、種、の、廣、く、は、い、ま、い、ま、い、と、
い、ま、い、ま、い、と、伊、の、其、中、と、一、一、遊、庵、の、集、一、義、用、の、各、
あ、り、ま、い、と

中法藏

長路

世、一、不、隣、甲、一、方、と、う、う、い、ぬ、毛、に、客、と、い、ふ、也、と、
予、程、は、は、し、も、時、一、と、い、ふ、か、一、と、人、の、い、ま、を、
と、ま、い、ま、い、と、い、ま、い、ま、い、と、い、ま、い、ま、い、と、
中、法、藏、の、子、也、と、い、ふ、也、と、い、ふ、也、と、い、ふ、也、と、
予、今、と、求、む、と、い、ふ、也、と、い、ふ、也、と、い、ふ、也、と、
ま、い、ま、い、と、い、ま、い、ま、い、と、い、ま、い、ま、い、と、
か、い、ま、い、と、い、ま、い、と、い、ま、い、と、い、ま、い、と、
こ、ち、の、れ、い、ま、を、い、ま、い、ま、い、と、い、ま、い、ま、い、と、
い、ま、い、ま、い、と、い、ま、い、ま、い、と、い、ま、い、ま、い、と、

河上ノ周類ヲ傳隱ナリ海軍ニ海塩ノ富ト知レ△能登ハ海軍
 ノ各産アリ海軍ノ八干トテ刻立物ナリ△戰國軍目牙ノ齊
 桓公ノ臣ナリ百味ヲ知テ料理ノ名人ナリ△神農古又ノ前ニ出
 △孟子海軍王ノ篇君子遠クを厨△の宮モ其意大將モ海軍
 ニ好色ノ海法多シ早覺ハ海軍ノ香ニのト重トノ富言ナリ
 ○宋女ヲ海軍ノ人ニ嫁スルノ事此ノ山ノ井此ノ人ニ
 此ノ人ニ△梅ノ木ノ下ニ居ルノ採文ナリ前ニ出スル
 傳語拾取ニ事ナリ△國領ノ礼ノ和部忍得ト云ル
 ○海ニハ歳ト勸懲ノ二用トナリ△て花トナリ酒産
 と稱一中華ノ海軍ノ事類ト云ル一海軍ノ自記ノ故
 傳ト云ル一海軍ノ事類ト云ル一海軍ノ自記ノ故
 道遙ト云ル一海軍ノ事類ト云ル一海軍ノ自記ノ故

と能登の筆格と云く歴々の歳と云く

○記類

紙念記

芭蕉翁

古きはくく古きぬま中らも如かへ
 意しん哀傷とそ綿衣のお北まぬの上
 響る春とちり梅としてあめは
 どの神とそ此層くちりちりあか
 らんとや海の一物とそちりあか
 け海のあかちりちりあかちりあか

山家の書といひ歌のさへあつたふかむかひして
 出所の國をいふふあつたふかむかひして
 歌の浦くは歌の浦のたのしみはなほあつたふかむかひして
 月とやうくさうのさへあつたふかむかひして
 のさへあつたふかむかひして
 といふふあつたふかむかひして
 といふふあつたふかむかひして
 といふふあつたふかむかひして
 といふふあつたふかむかひして

○註曰●長恨歌、非羽軍、家実、誰子共、云々、
 故格作り●文選詩、文練、双、
此詩解、四、合、飲、

●由良集、之五、
 ○評、
 と、
 と、
 と、
 と、

何尾亭記

井立聖平

一、
 二、
 三、
 四、
 五、

未だの因縁とていふにむとさるも尾を怪しむる
何の尾ありのもしもやと何とてはむと
うこ子孫の尾やとあり我とて神の尾と
ありてあるけりあひの尾信とありて
山神の古尾をわくと茶枝まゝとてあまて
茶葉子此茶園子とてあつたてりて
ありけり得難の掛をよとての枝は
七宝もある茶人ありて世界のり
うり作もあてさるもなれ何の尾も
うりてさるもなれ何の尾もなれ

拙と我と茶人も能人も海へ後生と祈ふ人
い尾とてなれとていふとていふとていふと

○註曰△仙傳ニ有る公古八前山より○表撰
△店れく叶喚子等ののり対し区免法とて
ありて梅るに世奇八世外ノ画居ラ云ハ
云く起し喚子身ニ返意ノ意ヲ結ル詞ノ
世等ノ躰ヲ論セシハ無心所着ノ絶妙ト
有るヲ愛せし言ハ細筆ルニ及ハス梅スル
ト云スノ前ノ名ヲト云フ所ハサ削ト欺トノ
古人ヲ粉成スル意地ノ虚言ハ多ニ知キナリ
○兼好は師
ルリカ ○念善集集の善い家の松風か
ルリカ

とらふくそあぢむ △昆布ニ山棟よふ葉とトらんハ狂言
ノ釣瓶ニ作爲司ノ詞ナリ按スニ瓶ノ系圖ハ馬糞ノ意ナリ
ト重部ノ音咄ナリ彼物ハ隠見ノ法ナリ

○浮うけ記けと虚う実けの常用う心けをむうころう何う尾けのうまけと
歌うらけに才う丁けと歌う人けの艶う曲けハ敵う一け才う二け茶う人けのう凡け侯う
とうこうあうまうをう毎うとう他う階うのうさう比うちうりう也う作う者うとう三う才うハ
他うハあうまういう佛う佛うのうるうもう疎うううてう自う己うのう名う利うとうらうら
わう他う人うのう内う仲うとう夜う々うのう中う々うとう々う々うのう子う格うトうて
恐うハうまうとうまうのう虚う實うありう作う者うのう姓う氏うとう文う鑑うハ
あうううてう中う々うりう柳う子う行うのう先う折う也う

二方楼記

桐花角

け構と二方とつお事をいしむい何よの共たれ地
の大観あれいせうらにありハ茶事とてまよハ
ありい凡新くあくらとぬハ翰と書とあまらるれ
まのふれ子なる花流るるちどりのちとてハ凡新とあ
さむけをまよふのまは部め遊ふハあまらるねと
ちるに又人の足をあはしハぬ人の中なけり皆
きくまよハありお下とてハいりハ海ハあまら
らハありハ茶事碗の二とてハハ茶のめ構し
目とてハハハ海のれハありハ。目とてハハハ能階大悟
の場とてハハハ保藤と頓鈴ハハハ飛と待とて

褒貶と言俗の遊ありしをいへば様あるをいへば
ありて山水一味の優格のありや又了る二方の
とありしをいへば

○註曰△岳陽記街遠山香長江此則岳陽樓之大觀也
△唐名竹月夜々月の月とてそのおとをいへば耳
△唐名竹月夜々月の月とてそのおとをいへば耳
△唐名竹月夜々月の月とてそのおとをいへば耳

○評云は江とて其名ありて人連能の虚空
そのまやまらるや蓋の接おと而して柔婉の
洒落とてまやまらるや蓋の接おと而して柔婉の
洒落とてまやまらるや蓋の接おと而して柔婉の

と文溢るたの苑中ありて和漢と通稱の文ありて

壺中園記

東荅坊

昔々遊越之新深而頃者水無月之半端
也正亦竹莊送暑日則鑑亭迎涼夜歷不尤
有而磨江山清絕之地而謂不有之風雅
處矣或曰者遊蓮咲寺而孟待十六宵
之影了或夜者泛月涼敷江而船遣二千
里之心了其友者各深于詩了月出于歌
了謂以流使人醉矣半我且漂其地而中

求能諧之人則独有左角之野而年未及
之十季于然知渡世人之實而識遊文月
之虛了則出而有條花鳥之色而教昭公
之千金舞兮入而有澄月雪之心而盡顏
子之一瓢他兮奚爾則我家之俳諧而斯
者遊虛實于見綴希有之男哉共其頃者
若了則思置等雨事未矣其後過十年了
共不南其人之行未則左在那所覺尤許
社止乎此頃見雲鈴之狀則依渡之浦山
陰有和溪不思議之壺而觀則有月花之

別世界與哉念時假月連之遠同鏡而送
是寄万里之情了則誠哉園林備四季之
花鳥而其口者吞雲漢之八九兮其真者
適逢滄海之五兮况夫黃金之花咲了其
國之山副近了則花亦者不待初櫻之春
而月亦麼忘紅葉之秋鳥矣言則飽菓珠
之八珍而為待鬼車之會季其輩者騷
人雅士而壺中之至者例之左角也未

○註曰竹在八慈竹亭下鑑亭七里別觀下何王新
浮元騷ノ各アリ●白氏ナニ千里ハ前ニ出スリ●司空曙遺

八景ノ一

廿一

かしこ。佐おの御るあう木の芽此意のかく紙
 い天運の本殿しけけの用あり一はて川童堤
 のま運るしうとるもあふ山しもおのりかたを
 の鳥籠を居このせらふよふこころい保れ也
 此等しはありておむや御はのらしく井原を
 抄下せとくまに本信杖の色とんこわし揚り出
 の後と下ゆかり一たさ。雄井川の流さく
 小俣部と月の下に布りて。ち原さそ船のさ
 一そりてけりち終よらとあふまうと山とあいにと春
 ころか此山陽もまらる。一まやま喜ら様所の山はく

一草花もあつたつてつ一かおむ此みらると
 て池田の浜へ寄らうあふり指授らるるも秘と
 にはり一況や東嶽の月のあふる義をいふ人此
 言もあふるにけり書の日せふちりに保あしは
 かりらるるも金や紙河のらあふりやまも赤砂川
 此等しあふあふりかの。特谷の西本もかもしれん
 さしに和漢とをららる。一とを我に此様さく
 比ふ事運二層の架とをさけけるく踏空の石帯
 とかきくるもさふり洞葉もさうもさしは操
 のるの指とえりむいも。棒葉と例し和漢の指

1/2

1/2

とくく一 壺峰とは書め便せしをて文と
 △五車此史人そとありて類く柳子庸の二字と
 勝とて此庸の人入つてもとの畢鉢羅の鑰と
 今そつらふに林玉輝の石とまわらうり七き加蓋の
 辨おちりありさるにまき此院さるるに禁す
 是るをむいしうてまき居くしふまは後記
 よる。越後の柳子庵して宗の情く慧く居
 とし他階のす柳子庵としつておはす
 く此二名とてあへいもろしうく嵐
 くあるはと編編のあまゆもろく自在居
 あり

○註曰 凌雲觀魏明帝造之摘星樓在淇縣トフ
 上西都賦 目眩轉而意迷 史記東郭先生貧困
 履不完行雪中履齧上無下足踐地云 晋史 天運
 木後夏八前ニ出たり ○依おの教多アリ 奉ニ及ハス
 ○雄神川ハ万葉ノ各所ナリ 歌ニ奉ニ及ハス 舟ノ歌ハ
 諸集ニ多シ 奉ニ及ハス △岳陽樓ノ江山八前ニ出たり
 ●え積詩 虫火乱飛 秋已近 ●例明詩 白日論 西河 素月
 出 車山嶺 △義皇王上ノ高卧八前ニ出たり ●杜律盤 刊 白鴉
 谷口栗 飯 煮 青泥坊 座 芥 △乙文ハ諸書ヲ暗記ナ
 異名ヲ五車韻瑞ト云リトフ △大論 皇鉢羅 崑崙 八仏 經
 選場ナリ 阿難ハ迦葉ノ弟ニ依テ 鑰穴ヨリ入テ 五千 金 卷
 ノ撰者ト成リトフ 此等ニ撰集ノ内證ニ寄スヘシ

○浮云記と履交あひまうりて浮雲の曲第一解
 と平云むそふとと面の風率にのまの部也と云
 是くして全く舞舞とふへまくと禁こと抑ことの
 詠諧より百世も兩名の位とあるまを記文の
 起結ちりに編錫の位と文のちりりてはと
 鼓舞の字もささくといふ一作者を越の石高
 位と書と申して榊果と標号ありかりて
 先師の符記と解着し一儒書を経よあとい和音
 連歌よこころ今此選場よ名と称さる



君林は通美の人といふこと

文操巻六終

